

---

# 知らぬがスサノオ

くまごろー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

知らぬがスサノオ

### 【NZコード】

N8192F

### 【作者名】

くまいじゅー

### 【あらすじ】

神主の祈祷で乳ガンが完治した話。内弁慶な男の笑えない喜劇。

(一)

娘の春香から一週間先の水曜日に意中の男を連れて来ると言われて、田所摶夫は何かと落着けない。春香が相手のことを教えないで人物の見当がつかないのだ。医者をしてるというのとモツ君という愛称はたまたま春香が口を滑らせて知れたことだ。

「悪く思わないでね。詳しく言えなのは意地悪でも占いでもないのよ。挨拶するまで口止めされてるのよ。彼、お父さんを驚かせたいことがあるらしいわ、ふふッ」

……早くも夫唱婦隨か……。

摶夫は娘の結婚に反対するつもりはないが、式を挙げる前から春香が隸属を強いられているようで面白くない。何より情報がないので気がもめる。興信所に頼めばいつぺんに片付くが、娘が望まないことはしたくない。医者というからには馬の骨ということはないだろうし人物も会えばわかることだ、そう自分を納得させる。

医者の婿さんを自力で探し当てた娘を大したものだと思つ一方で、摶夫には娘が凝っている占いが少々気になる。タロットカードも高島易断も自分でやるなら、それはそれでひとつ見識かも知れないが、春香は毎朝のテレビ占いを鵜呑みにする。そんな娘が医者だといつ男とつまくやって行けるのか心配にならなくもない。ついこの間も一騒があつた。

「ねえ、母さんが使つてたムラサキ色のガマグチはどこだつたかしらねえ。お父さん、知らない？ 牡羊座のラッキーアイテムがパープルのお財布だつて言つのよ。もう少しありましたものにしてほしいわア、まつたく……」

「朝の忙しい時にまたそんなこと。どうかしてるぞ」

摂夫は呆れながら娘のガマグチ探しにつきあつた。タンスの奥にしまいこんだ妻の遺品のなかから時代物のガマグチを引っ張りだして春香に渡した。

「これか？」

「これこれ。ありがと。ひやあ、危なかつたなア」

「おまえ、テレビ占いを本気で信じてるのか？」

「さア、どうでしょうね、ふふ。人がいって言つことならやつぱりやつといったほうが安心でしょ？」

父娘二人暮らしの彼女は朝のテレビでその日の運勢を知り、ラッキーカラーの服を選んで家を出る。終日身につけて過ごすラッキーアイテムが手元になければコンビニをハシゴしても手に入れる。彼女の徹底した凝りようは父親ばかりか同じテレビ占いを見て出勤していく同僚たちも呆れています。

その日も「パープルのお財布は？」と聞いてきた仲間に母親のガマグチを見せて「ダサいッ！」と笑われた。それを春香は仲間といつしょになつて笑い、これでいいと思う。美人で、仕事ができて、人づきあいが悪いとなれば職場は敵だらけになる。春香は父親ゆずりで少々理屈っぽい。人づきあいが悪いのではなく下手なのだ。それを自覚している彼女は、自分から弱みを作つて生意気に思われないように、浮かないように占いを役立てているに過ぎない。『人がよいと言つことには耳を傾けるものよ』という生前の母親の教訓とも述懐とも取れる言葉を守つて、今日の一日、母親を身近に偲べたのもラッキーアイテムのおかげだと解釈する。

薬剤師になつて六年、春香は年が明けて二十九才になる。摂夫はこれまでうわさ一つなかつた娘が結婚しようというのだからよろこぶべきなのだ。摂夫が春香の幼さをバカにできないのは、春香の結婚は二十九才だという死んだ妻の予言がどうやら的中しそうな気配だからだ。

春香が薬科大に入った年の夏に他界した斎子<sup>さいこ</sup>は高校の化学教師の摂夫と結婚して一人娘の春香を産んだ。家庭には波風ひとつ立たず

三人は平凡に暮らした。斎子はミッション系大学を出たがキリスト教信者というわけではなかつた。死ぬ前の何年かを神社に通つても、娘に神社参りを強制することはなかつた。

実の娘でも両親の過去を知つてゐるわけではないし、実の娘だから知らされないこともある。

## (一)

二十年前。

春香は小学三年生のとき盲腸で入院した。母の斎子は、盲腸など手術のうちに入らないとタ力をくくつていたが、摘出された娘の盲腸を目の前に突きだされて狼狽した。腎臓の形をした膿盆の上のそれは、ピンポン玉ほどに腫れ上がって、青黒い部分と赤黒い部分の入りまじつた不気味な肉の固まりだつた。

「パンクする寸前だつた。これが中でハネたら腹膜炎。お嬢ちゃん、お腹痛がつたでしょ？」

「え、ええ。まあ……」

斎子は医者に短くあいまいに答えた。彼女は上手くいつた手術にほつとしたいのが先で、母親の不注意を当てこする執刀医の言葉がわざりわしかつた。

……後は治る一方だからね、もう少し頑張るのよ……。

春香に母親の眼差しを向けて心のバランスを保とうとしたとき、勤務先の学校から駆けつけた摂夫が医者に会釈をするなり斎子を怒鳴りつけた。

「だいたいお前はのん気すぎるんだッ！ 取り返しのつかないことになつたらどうするんだッ。バカ！」

……何さ。タベ、鎮痛剤を飲ませて早く寝かせてしまえと言つて、茶碗を重ねたのはあなたのはうじやないのッ……。

摂夫が食器を重ねるのは、その晩をこの夫婦が同衾する合図だつた。

……アタシだつて久し振りだつたんだもの、仕方ないじゃないの。それに春香がわめき出したのは今朝あなたが出勤した後のことよ。ご近所は騒がせたけれど、救急車を呼んでこつして間に合わせたのだから、私に落ち度はないでしょうに……。

他人がそばにいると良い子ぶる夫は、斎子が思つてゐるよつに年齢の割には幼いのかもしれない。

「春香がさびしがるから病院に泊まりますよ。家のことは自分でやつてちょうだい」

「家事くらいなんだ。子供あつかいするなツ」

……家事を手伝わない夫だ。お皿の一、三枚ですめばいいけど……。

…。

摶夫は妻に労いの言葉一つかけずに帰つていった。

翌る朝、春香に付き添つてゐる斎子に警察から電話が入つた。夫が交通事故を起こし、市立病院に担ぎ込まれたのだ。勤務校の生徒のよろけた自転車をよけて道路の反対側の電柱に激突したという。対向車があつたら大惨事だつたという声を受話器の底に聞いて、斎子の視界が暗くなつた。

……何よ。アタシだけ悪者みたいじやないツ……。

斎子は病室の窓から、神さまか仏さまがいるらしく中空を見上げて腹の中で罵つた。

「春香、看護婦さんの言つことをちやんと聞いて良い子にしてるのよ」

春香に言い含めて、斎子は市立病院にタクシーを飛ばしたが、駆けつけた夫のベッドは空だつた。看護婦の一人が応急手術だからすぐには病室に戻りますと言つた。

「応急手術？」

「折れた骨がズレたままくつつかないように足に重りをつけて牽引するんです。踵にドリルで穴を開けるだけの仮の手術です。すぐに済みますから病室でお待ちください」

踵の骨にドリルと聞いて斎子は鳥肌が立つた。

やがてストレッチャに仰向けになつた夫が運ばれて來た。斎子に気づくと摂夫は小さく右手を上げ「ヨウツ！」と言つて笑つた。  
…照れかくしか……。思いのほか元気な夫に斎子の緊張が一気に弛んで、ムカムカして來た。

「なにがヨウツなの。春香の病院を教えたのはあなたなんでしょう？  
あなた、しゃべれたのよね。どうして同じ病院にしてもらわなかつたのよ。気がきかないんだから」

「ばかア、そんなこと言つたつて……」

「で、相手の生徒さんに怪我はないのね？」

「それは不幸中の幸いでな。あ、そのうち学校の連中もやって来るだろうから、応対をたのむぞ」

……不幸中の幸いも不幸はウチで幸いはヨソだ。厄払いしてもらわなきやだわ……。

複雑骨折した足は長くかかりそうだが、他にもハンドルにつけて勒帯が切れた鎖骨の片端が摂夫の喉の下にポコリと盛り上がりつていた。

「見た目はこんなでもな、ちつとも痛くないんだ、ははは」

……強がりなのか、ぬけているのか？ 後遺症の心配はないと医者が言つてくれたのが幸いと言えば幸いかもしない……。

斎子はとにかく春香の退院までリポビタンロでがんばらなくてはならない。

斎子はバスとタクシーで二つの病院を何度も往復した後にやつとすえて粘るような臭いの正体が他でもない自分の体だと気づいた。家に寄つて洗濯機をまわし、汗臭い身体にシャワーを浴びた。シャワーを浴びながら泣きたい気持ちになつたから実際に泣いたかもしれない、口惜しくて。

二人分の着替えを抱えて乗り込んだバスで、斎子はうつらうつらした。窓外を見ると、バスは神社を通り過ぎるところだった。

「神社……」

斎子は反射的に降車ブザーを押してしまった。他に降りる客はなく、彼女は仕方なくバスを降りた。

神社のあることは知っていたが、春香の七五三は主人の故郷だつたし、ここには初詣にも来たことがなかつた。斎子が神社に立ち寄る気になつたのは、たぶん大学生のときにキリスト教に熱心でなかつたせいで、敷居の高い教会より神社のほうが気後れせずにすんだのかもしれない。

群馬県沼田市。須賀神社は素戔鳴尊すさののおを祀つた古くて大きい神社だつた。初詣、節分、八月の例大祭おきよんはそれなりに賑わいを見せるが、行事のない平日はこんなものかというほど閑散としている。斎子は蝉しぐれの中を鳥居をくぐつてツカツカと入つて行つた。  
……今日も暑くなるわ……。

重たい綱に力をこめてワニグチを鳴らした。「ゴワン、ゴワン。一礼二拍手、さらに一礼。斎子の拍手は大きな音で鳴りひびいた。……へえ、拍手がこんなに気持ちいいなんて。難しい話よりもこうして気分がシャキッとするほうが大事だわよ。さ、スサノオさま、しっかり家内安全をたのみます……。斎子は思い切つて賽銭箱に五百円玉を投げ入れた。

荷物を持つて振り返ると、白の着物に浅葱色の袴をつけた男の子が幕の手を止めて斎子に目礼した。利発そうな端整な顔立ちの少年だった。

「きみ、ここのは子?」

「はい……」

「そう。広い所を一人でたいへんねえ」

少年は大人から声をかけられるのに慣れていないのか、俯いて顔を赧あからめた。

……可愛いいいッ！ こういう男の子ならアタシも欲しかつたわ。学区がちがうのでわからないけど、一中の子かしらね……。

春香は術後の経過がよく四日目には退院した。母娘は病院から帰りにバスを途中下車して須賀神社に寄り、娘が無事にもどれた礼をした。拍手は今度も気持ちよく鳴った。何を教えないでも場所柄がおごそかな気持ちにさせるのだろう、春香も小さな手を打つて母を真似た。

### (三)

そして六年後の冬。

……アツという間だわね、春香が小学校の三年だったんだもの…。

……  
斎子はひとり須賀神社の鳥居に寄りかかってぼんやりと社殿眺めていた。六年前を思い出せた彼女が、この日、自分がどうやって病院から帰ったのか覚えていない。彼女の心は鉛のように沈黙しつゝ重く、覚束ない足取りでここに辿りついたのだ。

斎子は以前から身体がだるいと思うことがあった。

……あ、また……

彼女は右眼の奥にパリッと静電気の弾けるような痛みを感じて、思わず両手を鳥居の柱に突つ張った。きつく眼をつぶつて痛みをやりすごした。痛みは一瞬で次の瞬間に消えてしまう。必ずというわけではないが、この痛みがあると一日一日して身体がだるくなる。痛みと身体のだるさに直接関係があるとは思えなかつた。月に一度ほどの眼底の痛みを彼女は生理に関係したものだらうと素人診断を下していたが、それでも眼の奥というのがやはり気になつて、二月前には眼科をたずねた。若い女性の眼科医は眼圧測定の後、特に異常は見当たらぬがくすりを出しておきます、と斎子に処方箋を渡した。薬局で聞くと効き目のおだやかな血圧降下剤だということだつたが、だるとその前兆の眼底に走る痛みは相変わらず襲つてきて、くすりが効いているとも思えなかつた。眼科医にその旨を告げると、心因性のものだらうからと心療内科の受診を勧められた。

……心因性？ 便利な言葉ね……。

身体がだるくて家事がおつかになると夫に告げると「お前のはナマケ病だ。くよくよするなんてお前らしくもない。気にし過ぎだ」と言つだけで心配もしてくれない。斎子は夫の言つよつにナマケ病かもしれないと思いながら、夫の愛情は確実に田減りしたと思わないわけにはいかない。

心療内科ではうつ病の診断が下つた。だるさは月に一度のことで、ふだんは何ともないから、今度も投与されるべすりが効いているのかいなかわからない。担当医にそつと内科の精密検診を受けるように言われて、斎子はムツとした。……ウジじゃなかつたの？ 今までの抗ウツ剤はいつたい何だったのよッ？

それが今度は下山病院で、先日の血液検査の結果とレントゲン写真をくどくどと説明され、斎子は乳癌だということになつたのだった。左乳房のしこりは三年も前からできていたという。老齢の院長は事務的に、しかし、必要とも思えないほど長いこと斎子の形よい乳房を触診した。

……上外四分圈だと何だとかむずかしそうなことを言つながら、やるわね、あの院長も、フン。それにしても医者の口から『気を落とさずにがんばりましよう』なんて聞くとは思わなかつた。治る見込みが少ないようなことを言つるのは不用意もいこと。

院長は、家族の協力があるなどいとでは闘病中の気の持ち方がちがうと追討ちまでかけたのだから、斎子の癌は決定的で治療は長期戦になる。『家族に協力してもらいましょう、といつ院長に斎子はやつとのこと小さくうなづいた。』うれていたはずの涙が頬をにり落ちた。

病院からの帰り道、午後の三時だといひのに彼女の目の前は黄昏どきのように暗かつた。

春香の同級生、武山真由やんのお母さんの亜希子さん、木嶋省吾くんのお母さんの久枝さんもお富参りから七五三までこいでやって、今でも参拝に通つてゐる。高校進学説明会のとき亜希子さんが、

『須賀神社の『J利益で癌が治つた』なんて言ってたけど、まさか、ね……。

斎子の心が小耳にはさんだそんなことをどこかに覚えていて、須賀神社に足を運ばせたのかも知れない。夫にも娘にも打ち明ける気になれず彼女はひとり焦つた。……受験を控えた春香に聞かせる話ではなし、夫ともこの頃は気持ちがすれちがうばかりだ……。

石造りの鳥居で斎子の身体はすっかり冷えてしまった。彼女は自分で励まして公衆電話に歩いた。……悪い方にばかり考え方だめ。春香だつてまだまだこれからじやないの。亜希子さんにそれとなく聞いてみよう。どうすればJ利益に与れるのか、どんなご祈祷で、謝礼はどうほどなのか……。

待ち合わせはP.T.Aでよく使う中央公園前の『セゾン』にした。一足先にと入った、見なれたはずの喫茶店の内部が、この日は双眼鏡を逆さにのぞいたように遠くて、小さくて、暗かった。

ウェイトレスが注文のコーヒーを運んで来ると、斎子はその匂いに吐き気がした。受け皿でカップにフタをして来るはずの人を待つた。亜希子さんが教えたのだろう、喫茶店には省吾くんのお母さんもやって來た。

「どうしたのよオ。電話であんな沈んだ声を出されちゃ心配になるじゃないよオ。『ご主人が浮氣でもしたの?』

武山亜希子は笑っていた。

「やだ、そんなんじゃないわよ。アタシの声が沈んで聞こえたってゆうの? やだわ」

……夫婦の気持ちがすれ違つても、夫は電車やバスのすれ違いほどにも気にかけていない。ボロが表に噴き出さなければ、生活は良好に営まれているという考え方らしい。表面はともかく、心の底のほうでは一人の気持ちは逆方向に流れている気さえする。すれ違いをすれ違つたままにして慣れてしまふ夫の神経がわからない。特定の女と浮氣していなくたつて夫婦の心は離れてしまうことがある。浮氣をしなければ妻を放つたらかしにしていいのか。アタシは満た

されないで何年過ごしてしまったの……。

「なあにい、これえ？ あーっはつはつ

「コーヒー カップを見た一人の笑い声で斎子は我にかえった。

「注文してから欲しくなくなっちゃって。ようしかつたら、ビリード。

粗「コーヒー で何ですけどオ、ははは」

自分の直面している不幸を感じかれまいと斎子は一人の後から笑つてみたが、ふだん神でも仏でもない女がいきなり神社の話を聞きたいといえば、家庭不和か家族の病気が相場だ。

「だれなの？ あなた？ ご主人？ まさか春香ちゃん？」

斎子は聞かれたくない質問に答えたくなかった。作り笑いの首を振つて、神仏のご加護は本当にあるのか 単純に 知りたいだけだと言った。経験者の一人のことだから須賀神社の話になると見込んでのことだつた。

「いいわ、言いにくいことは無理には聞かない。で、知りたいことつて喜代沢長明さんのことね？」

「キヨサワ・チョーメイつていつの、あそこの神主さん？」

「久枝さんとアタシで勝手にそう呼んでるだけ。本当はナガアキラつていうんだけど、アタシらの寿命を延ばしてくれたから長命に引っかけてチョーメイさん」

「ふーん」

「チョーメイさんのことは、口で言つて誤解されても困るのよ。あそこを考えてるなら騙されたとおもつて一度足を運んでみて。『ご利益はゼッタイ間違いないわ』

亜希子が奥歯に物のはさまった言い方をして、久枝が二口二口とこれにうなづいて言葉を継いだ。

「そうよ。一度足を運んで騙されてみてよつ。アタシも、子宮筋腫だつたけど、どう言つたらいいのかしら、治つたのがチョーメイさんのおかげだつてことは確信もつて言えるんだけど、証拠はないのよね」

はつきりしない方が斎子には面白くない。……証拠なんてな

くていいから、もっと具体的に言ひてよ。あなたたち経験者でしょ  
うに……。

肝心なところをぼやかされて、斎子の知りたいことは一つも教え  
てもらえないかった。仕方なく斎子の方から話題を子供の受験のこと  
に切りかえると、一人は堰をきつたように、塾の女の先生は経営者  
の年若い愛人で、生意氣と色気だからつきし指導力がないとか  
何とかゴシップをやり始めて、結局お茶飲み話になってしまった。  
斎子は距離を感じた。……信じてみようと思ったのに……。田にジ  
ワツとたまるものがあつて涙をかんだ。……他人のことを親身に考  
えてくれる人なんてそうはないものね……。

それでも一人は心配顔で別れ際に言った。

「とにかく大事にね。お役に立てなかつたようだけど、須賀神社  
はゼッタイよ。斎子さんが一度お祓いを受けてからなら、そこは仲  
間どうし、詳しい話も出来ると思うのよね。信じる者が救われるの  
は何教だつて同じよ、ほほほ」

……ご祈祷をしてもらひのに初心者も経験者もないだらうに……。

#### (四)

斎子は左乳房をさすりながら一日ほどほんやり過ごした。いつた  
ん入院してしまうと退院がいつになるかわからないという不安から  
入院の決心がつかなかつた。家を空ければ受験の春香にしわ寄せが  
行つてしまつ。せめて高校が決まるまでのあと一ヶ月は家についてや  
りたいと思う。先延ばしするうちに癌は命を奪いに来るからグズ  
グズしてもいられないが、一刻を争う手術というのでなければ、そ  
のくらいは先に延ばせるだろうと考えた。入院になる前にご祈祷を  
してもうおつと思つたのだった。

斎子は念入りに化粧をして須賀神社の境内に足を踏み入れた。

……どうかしてゐるわ、医者が癌だと言つてるものを神社で何とか

しようなんて。神主さんほも「お爺さんらしく。何か危なつかしい氣もあるし……。

祈祷にどことなく信用のおけない怖さのよつたを感じて、社務所で氣散じのおみくじを引いてみると、思わぬ大吉がでた。病平癒遠カラズ。見なれない筆文字のかすれた印刷でそうあった。：「一人のお母さんと同じ」祈祷をやってもらわなきや……。

「ごてごてと眩しい金属で威圧するでもなく、煤けておどろおどろしい像を並べて齎すでもなく、須賀神社の社殿は冬晴れの抜けるような青空を背景に、人間の手で浅ましく莊厳されるのを拒んだシンブルなたたずまいだつた。清々しさに心打たれた斎子は、神々が降臨するのは人間の惑といふ手垢のつかないこうした所なのだろうと思つと、神さまに泣きつくるのではなく不思議に任せようという気がしてくるのだった。

ひょろりと背が高く彫りの深い顔立ちの老人が現れた。

頭を垂れた斎子の上を榦の枝がバサツ、バサツと行き来した。枝についた御幣が斎子の頭を撫でた。巫女が大きな太鼓をドドンと打ち鳴らすと、束帯姿のチョーメイさんは正面の鏡に向つて、大きい漢字と小さい漢字の混じつた巻紙を朗々と読みあげた。榦の枝を真横に捧げもつて老神主が深々と礼をすると、祈祷はあっけなく済んでしまつた。

立ち上がりつてお辞儀をしようとするが、チョーメイさんから本殿の裏手にまわるように促された。彼女は拝殿のお祓いに次ぐ、秘儀の第一部ともいうべきものを期待していたので老神官の後をついて行つた。……省吾くんのお母さんが「本殿の裏手」と言いかけて、亜希子さんがそれを制したのがここだわ……。

一組の真つ白な分厚い絹布団が木の床に直に延べてあり、喜代沢長明がその枕もとで束帯を脱ぎだした。

「楽にして横になりなさい」

「ここにですか？」

「治りたくて来たんだろう?」

「そ、そうですけれど……」

斎子は布団、羽二重だけの男、今ここにいる自分の関係を改めて考え直した。正直なところ、ここまでの心の準備はできていなかつた。

「おまいさん、乳癌だな」

「どうして分かります?」

社務所に出した祈祷依頼書には病氣全快とだけで病名までは書いていない。

「ワシは医者ではないからな、手術もせんし、薬も出さん。それで病が治るのだからワシの力でないのはわかるな」

斎子は黙つてうなずいた。

「本殿の鏡は神器で、ラブホテルのミラーとはわけが違う。さすがに拝殿では畏れおおい。それで裏にまわつてもらつた」

……冗談にしてもプロの余裕にしてもラブホテルといつのは品がないさすぎはしないか……。

真剣な祈祷依頼者の斎子は顔をしかめた。

「ここで何をなさる? どうのです?」

斎子は時間かせぎに答の知れた質問をした。

「まくわ婧うに決まつとろうが。医者が見放した者が現に何人もワシの手で、いや、手ではないがな、治つている。なぜ治るかなど知らんが、ワシと媾つた女はみな生命を永らえる」

……バカなツ。亜希子さんも久枝さんに抱かれて治つたというのか……。

神主は羽二重を脱ぎかけていて、顔にはすでに冗談の気配はなかった。

「祈祷を受けたのに決心が萎えたか? ふむ。ま、そういう女もいるな。せんみよう宣命を含めたいところだが、ワシとてなぜ相手になつた女だけが助かるのかわからん。常識では考えられんことくらい百も承知だ。はつきりせんことで賽銭をもらつわけにも行かんので宣传はせん。人助けができればワシの使命は全うされる、それだけのことだ」

喜代沢長明はふつと溜息をつき、解きかけた帯を締めなおすと、  
斎子に半歩近づいて胡座をかいだ。

「ま、座れ」

喜代沢長命は問わず語りに話を続けた。

「ワシがちょうど七十のときだ。なんの拍子かワシの中に久しく忘れておったものがムラムラと湧き起つてな、体の一部に血がみなぎつて若者のように熱くなつた。斎戒沐浴をすませて拝殿に昇るのが常だが、このときはどうにも我慢がならなかつた。それで、厄払い來た四十女を手込めにした」

神主のあからさまな言葉に斎子は啞然とした。……なんで自分の不利をわざわざ言つのだろう……。

「神に仕えて五十年のワシが、あれは一体どうしたのだつたか。ワシは己おのれに起つた劣情にガクゼンとしたな。ワシにも立場がある。氏子ばかりか、ここに来る者はだれ一人ワシを疑わん。それを女を手込めにするなどあつてはならんことだつた」

……踏み止まれなかつたのはアンタが好色だからじゃないか……。  
「決心の鈍つたお前には言い訳にしか聞こえまいが、ワシは背中を押されていたのだった。背後に声を聞いたように思つた。『お前にみなぎつた力を女に与えるのだ、惜しむなッ』と言われた気がしたな」

「それが啓示だつたのですか？」

「今にして思えばな。次にはそれが一段とはつきり聞こえてな、ワシとしてはもはや疑いようがなかつた。『女を救わんのか。世間の誤解をおそれて女を見殺しにするか。それでいて素戔鳴尊の名を騙るか』とな。しかし、ワシはそれを聞いてまだ迷つておつた。当然だ、女を救うために陵辱せよとは大学でもどこでも教えちゃくれなかつた」

「大学？」

「ワシの通つた神道学科はひどいところだつた。神社の実入りを減らさぬように実力のある仏教やキリスト教の宗団とはうまく折り合

えと叩き込まれた。弱腰の神社経営学科だな、ははは。常識に飼い

馴らされてあたら人生の大半を過ごしたと気づいたときには五十を過ぎていた。ワシは五十一で初めての子供を授かった

「ずいぶん遅かったんですね？」

「大変だったのは家のほうさ。ワシと同級の五十一で初産だったからな」

「まあ……」

「とにかくワシには守らねばならぬものが出来た。収入を増やすにやならん。神主の逃げた貧乏神社をかけ持ちしたり、ほら、そこの県立女短で講師をしたりな」

「大学の先生をされたのですか？」

「生活のためだ。古事記を上代文学として教えると言われたのは面白くなかったが……」

「アタシには文学と宗教の区別がどんなかも分かりませんが……」

「ほう、お前さんは文学をやりなすったのかい？」

喜代沢の眼が光った。

「区別はむずかしいな。どっちも人を狂わせる。ワシにも正氣と狂気の区別がつかん、あつはつは」

神社に来た目的を思えば中途半端では帰れない、かといって秘儀に与る決心もつかない。斎子は神主の話をただ長びかせたかった。そして喜代沢の話は長引いた。

「宗教というのはな、虚の世界だ。いや、虚といつても嘘っぱちやでたらめというのではないぞ。この世は虚実の入り混じった世界で、虚を知ってこそ実の世界が充実する。実の世界を充実させる見えない力が宗教だということさ」

「…………？」

「人は欲に駆られて実利に走るが、虚の世界を知らんでは実がむなしくなる。坊さんたちは空と呼んでるが、ワシは仏教もキリスト教も知らん。何教にせよ、人が充実した生を生きるには虚心坦懐つてことだろうよ」

「おっしゃつていることがよくわかりません、虚とか実とか、……」

「ふむ。お前さんの癌が実で、ワシの所に求めに来たものが虚だ。

世の中はさ、虚と実のギッタンバツコン」

「虚と実がシーソーをするのですか？」

「自分一人じや上がりも下がりもすまいが？ 反対側に自分でない何者かがいて自分のほうが上下する。宗教は見えない相手を感じるギッタンバツコンだ」

「…………」

「自分ひとりで上がり下がりしているなんて錯覚だよ。宗教も文学もギッタンバツコンの尻の感覺だよ。それで自分が虚に求めるもの、自分を動かすものが何かわかる。ま、宗教も文学も理屈ではないという理屈だな、あつはつは」

斎子は喜代沢の饒舌につきあつていればよかつた。

「しゃにむに働いてそれでよいと思っていたが、せがれが大学に受かつて一安心したらワシは七十の老人になつていた。そこで己れの使命を改めて考えてみたが、考えてみるまでもなくワシは神主なのだつた。このまま神社の管理人で無事につとめ終えるか、余命を素菱鳴尊の意志を実践する宗教人として生きるか。よわい七十のハムレットだつた、あつはつは」

「迷われた……」

「ワシも神社を一つ任された富司だからな、口クに先のなくなつた齡になつてたかが女一人でヘマはしたくないという氣があつた。しかし、祈祷を受けに來た者が信じておるものをワシが信じないでは、それこそ宗教に対する冒涜だ」

「それで七十才にして真の宗教者の道を選ばれた……」

「そうだ。だが、理屈からではない。虚の世界は人には極められん。感じる世界だ。ワシは背中を押す力に改めて従う決心をしただけだ。そして四十女の眼をのぞきこんだ。すると……」

「…………」

「女は自分から帶を解きだしたな」

「眼を見ただけで？」

「そうだ」

「その女性は神主さんの背後の力にその場で帰依したということですか？」

「そうだろうと思う。女が身をまかすのはギリ、ギリの決心だろう。女も厄払いに来たときにはもう覚悟が出来ておったのだな。女はまばたきもせんでワシを見た。最後の望みをワシに賭けてきた眼だ。何が起こるかもわからんのに、いや、わかつていてなお、待ち望んでいる風情だつた。そんなわけだから、ワシが女を手込めにしたと

いう言い方は正確ではない」

「占いのように理解を超えた力を信じるか拒むか、二二一一つといふことですか？」

「はははは、占いはよかつたな。当たつた外れたですんでしまえば楽でいいわなあ。占いなら商売になろうが、信じた者、信じられた者の間に確かな力が通い合わんことには宗教とは呼べん。女はワシの背後の力を感じ取つて救われると直感したのだな、素直にワシに身をまかせた。そして媾いがすむと、何事もなかつたように身じまいを整えて本殿にまわつた。拍手を打つ音が聞こえて、女は帰つていつた」

「…………」

「それから一週間ばかりして、女が、その節は、とお礼詣りにやって來た。連れ立つて來た亭主も、妻がはつらつとしてふさぎ込むことがなくなつた、暗い影がすっかり取れて別人のようになつたと大変なよろこびようでな。以前にもまして夫婦円満に暮らしていると言ひついで、ワシは使命が果たせたと思つた」

「…………」

「素戔鳴尊というのも人を助ける力に付いた名だな」

「そのご主人という人が神主さんとその女性とのことを知らなかつたからでしょう?」

「さあ、女がどこまで亭主に打明けたものかワシは知らん。女房を

自分のものだと思っている亭主なら姦夫のワシを許そうはずがない。女房を寝取られたバカな夫だと世間の笑い者になる。知らぬが仏なら仏がよいのさ」

「知らないていいことまで知つて奥さんの快復をよろこべるものでしょうか？」

「よほど女房が可愛かつたんだろうよ。女房はそうした亭主でありがたかつたろうよ。夫婦円満だと言つのだから、そういうことだろうさ」

……そんな夫婦が実際にいるんだろうか。いるとすれば何と羨ましい夫婦だろう。四十才といえばアタシと变らない。アタシだつて夫に愛想が尽きたわけではない。夫婦仲が今のように思春期の春香にだつていい影響はない。どうしても健康な身体を取り戻して心身ともに夫から愛されなくてはならない。そのためにも治らなければならぬ。治るためには……。

斎子が老神主の眼を見ると、逆にのぞきこまれた。その眼は夫にはついぞ見たことのない若々しい力に耀いていた。老人はすでに素戔鳴尊だつたのかもしれない。斎子は自分の体が老人の眼の中に吸い込まれていくような気がして思わず目をつぶつた。そして再び目を開けたとき、自分の居場所としての布団以外は何も眼に入らなかつた。彼女はスカートのホックを外し、延べられた布団に横になつた。

「うむ、これより須賀神社宮司喜代沢長明は素戔鳴尊の意志と力を田所斎子に取次ぐ。受入れいッ！」

老人とは思えない、斎子の骨を折らんばかりの力だつた。ぐいつと引きつけられて彼女は息ができなくなつた。体が触れ合つた瞬間に炎のようなものが股間から脳天を突き抜けて行き、身体に火がついたようだ。頭はしつかりしているのに何も考へていなかつた。やがて炎の勢いが収まつてくると、自分の体に内側から熱い液体がみなぎつてきて身体中を駆け巡つた。あれは、身体を治したい一心がひき起こした幻覚だつたのか。あの炎は善でも悪でもない 力だ。

あれが生命を維持する力だつたのだ。斎子は見えないはずのものが見えたと思った。身体が別人のように軽い。治つたわけではないだろうが、治つた氣がするのも不思議だつた。医者の方に残されていなかつた時間が、ここには滔々と流れている。それがアタシの身体に流れ込んだのだ。時間というのは別の世界に湧き出してこの世に送り込まれてくるものかもしれない。斎子はこうした感覚は他人に話しても分かつてはもらえないだらう、寿命といつのはこれを言つのだらうと思つた。

……夫は信じないわ。信じてもうひには乳癌が直つたことを病院で確認してもらわないとね。いきなり言つてあの頑固者が認めるわけないもの。だいじょうぶ、アタシの身体の中には時間がある……。

### (五)

ダイニングで期末試験の採点を終えた摂夫にウイスキーの水割りを作りながら斎子が聞いた。

「スサノオつていると思う?」

「なんだ、いきなり?」

「あなたは信じないわよね」

「だから何だよ、それは?」

「じゃ、アタシが乳癌だつたって言えば、信じる?」

「えツ、おいツ、お前、乳癌なのか?」

「もう治つたわ。驚いてくれただけでもアタシ、ようこばなきやいけないかしら、ははは」

「ばかツ。たちの悪い冗談は止めろツ」

「ホントの話よ。お医者さまはアタシの癌、二年は経つていたらうつて」

「まさかア。お前、入院なんかしなかつたじやないか。癌なら摘出しなきやならんだろうが。ひとを担ぐのもいい加減にしないとついには怒るぞつ

「先だつて病院に行つたらアタシの乳癌、影も形もなくなつてたわ。お医者さまは首をひねつてらした。申し訳ないけど何だかすこく愉快な気分。あはは」

「ほら見ろ、元からなかつたんじやないか」

「あつたものが無くなつたからお医者さまが不思議がつたんじやないの。ね、よろこんでくれるでしょう?」

「信じられんなア、そんなこと」

「ね、よろこんでくれるの、くれないの?」

「こつ見えても科学者はしぐれだからな。この田で見るまでは、ようこじべない」

「そ、疑つてるわけね。じゃ、病院へ行つてみなさいよ。レントゲンもカルテも残つてるわ。でも、ガツカリだわね、見るまではよろこばないなんて、アタシを愛してないってことだもの」

「なに言つてんだ。愛してなきやお前と結婚なんかしてないだろ?」「またそつやつて逃げる。むかし愛してたつてことが今も愛していれる証明にはならないでしょ。一度でも愛されたことのある女がその実感をなくすのはたまらないものよ。夜だつて生理的なだけで、変わつたわよ、あなた。何年も同じ乳房をまさぐつていてシコリに気づかないんだから、はしくれ科学者の目といつのも当てにならないわ」

摂夫はカチンときた。

……俺はお前と春香を養つてきたんだ。それを愛していらないなどと言わせてたまるかつ。俺の愛情が一時ほどじゃないにしても、それなりに満足するのが妻つてもんだッ……。

喉まで出かけた言葉を飲みこんで、摂夫は言い換えた。

「どこの夫婦だつて同じだ。男は年相応にやることがふえて来るんだ。いつまでも新婚みたいにベタベタしてゐるわけにいくかよ。常識だ、そんなこと」

摂夫には身体つきが急に大人びてきた中三の春香が、このごろは何かと言えば母親に味方するよくなつたのも面白くない。こんな

話を春香に聞かれでもしたら面倒だ。

「よしあ。明日、病院に行つて確かめてくるッ。それにしてもお前がそんな非科学的な頭だったとはな。結婚前に気づいていたらなア……」

「ひどいッ。どいつの頭がたしかなのか病院でとっくり聞いてきたらしいわッ」

## (六)

白髪頭にべつとり整髪料を塗つた院長の下山が摂夫の前で首をひねつた。

「ウチの評判にも関わるし、守秘義務といつのもあるから、このことは内々にお願いしたいですな……」

「（心配には及びません。決してご迷惑はおかげしませんから）

「旦那さんね、実は私にもサッパリわからんです。いや、奥様が治つたのだから結構な話じやあるんですけど、どうも腑に落ちません」「じゃ、家内がこちらに伺つたとき乳癌だつたというは本当なのでですか？」

院長はうなずきながら、蛍光灯の点いたボードに証拠のレントゲン写真を何枚も差し換えた。

「医学的にはあり得ることですか？」

「皆無というわけではないでしょうが、まれもまれで医者としては信じたくないですね。ただ……」

「ただ、なんです？」

「まれなはずが、どうも奥様だけじゃないんです。他にもウチの患者ですが、ここ一、三年で六人ほど

「六人もいるんですかッ！」

「しあ。大きな声を出さんでください。乳癌が他に二名、子宮筋腫が二名、心筋梗塞が一名……。精神科からもアルツハイマーの患者が一人完治したと報告が来てるんです。いや、原因はともかく、ウ

チで治つたなら宣伝になつて結構ですが、よそで治られては逆宣伝です。医者にとつて評判ほど恐いものはありません。ま、この六名は他の病院にかかつたようすもないですから、それも考えらるんですね。追跡調査をやろうにも、だれからものOKがもらえません。学会にも報告できんのです……」

キツネにつままれたような思いで帰宅した摂夫を斎子が得意そうに出迎えた。

「どうでした、病院の方は？」

「探究の余地ありだそうだ」

摂夫のふて腐れた言いつぶりに斎子は機嫌よさそうに笑つた。

「それってどういうことなんでしょうねえ？ おーっほっほ

妻の勝ち誇つた笑い声は夫の瘤にさわつた。

摂夫はひとり書斎に閉じこもると本棚のウイスキー瓶からゴボゴボと湯飲みに注いで、一気にあおつた。……科学が挑まれている？ 何に？ 斎子のやつ、スサノオとか言つたな、俺に宗教を信じるかとも。はア、妙なものに凝つてくれたな。よし、情報を集めて分類整理して、あいつが何に首を突つ込んだのか突き止めてやるッ……。

一方で斎子も考えていた。……夫は、宗教に堕ちるとか嵌まるといつたイヤな言い方をする。宗教など信じる者は理性行使できない低級人間だとまで言いきる。夫が軽蔑する宗教に妻がオちてハマつたとなれば無神論者のプライドが許さないのだろうけれど、いくら非科学的でも自分の妻が命を取りとめたことを素直によろこべないのは致命的よ。ウチの愛も干涸たわね。チョーメイさんが聞かせてくれたご夫婦のようにはとてもなれないわ……。

摂夫は春香のいないとを見計らつて台所の斎子を訊問した。

「だから、スサノオ様のお力を授かつたからアタシの乳癌が治つたんですつてば。でも、あなたは別にうれしくもないのでしょうか？」

「ヤマタノオロチを退治したスサノオか？ あんなのは根拠のない神話だぞ」

「そうね。非科学的なおどぎ話を聞いても仕方ないでしょ」

「いいから、聞かれたことにだけ答えろっ」

「まつ、アタシに命令？ 刑事ドラマみたい」

「どいでスサノオの力をもらつたんだ？」

「中町の須賀神社ですよ。亜希子さんも久枝さんもあそこのスサノオ様に治していただいたのつ。もう、いいでしょ。春香がじきにお腹をすかして帰つてくるんだから、じやましないでちょうどだいっ」

「亜希子さんと久枝さん？」

「武山さんとこよ、マコちゃんのお母さんと省吾くんのお母さんっ」

「武山さんとこが乳癌で木嶋さんが子宮筋腫だな？」

「驚いた。よくご存じです」とツ

「神社だから、みんなお祓いを受けたのだな？」

「そうよ、時期は別々だけど。ね、もういいでしょ。夕食が遅くなるわ。後にしてツ」

春香が塾から戻つておそい夕飯になつた。摂夫はそそくさと食事を済ませると、珍しく食器を重ねて、そのまま自室に引きあげていつた。食器を重ねたのは夫婦いつしょに寝る合図で、斎子が応じられないときはその場で食器を伏せる決まりだつた。母親は娘の食べている前で、よそつてある自分の食器をひっくり返すわけにいかなかつた。

……なんてこと。冷戦続行中だというのによくそんな気になれるわね。どういうつもりよ……。

斎子は寝室で夫から根ほり葉ほり聞かれるのはたまらないと思つた。水掛け論の平行線になるのはわかりきつている。……理解しようというのじゃない、覆そうというのだわ。夫には宗教も論証できない不完全な対象でしかない。しかし、アタシは切羽つまつてた。好きとか嫌いじやすまなかつた。スサノオ様を選ばなくてはならぬ事情を抱えていた。たしかにアタシには理性を働かせる余裕なん

かなかつた。神さまに救つてもらおうとこの身を投げ出したのは勇気なのに、夫には子供の向う見ずにしか見えない。夫にはアタシが狂つて見える。得体の知れないモノを信じられては科学教徒のコケンにかかるとでも言いたげだ……。

## (七)

寝室のドアを開けるとタバコの臭いがした。

「ここでタバコは止めてつて何度も言つてるでしょッ。副流煙が猛毒だくらゐ化学教師が知らないはずないでしょうに、まったく」

「いやあ、すまん、すまん」

頑固な摂夫が珍しく素直に謝つた。タバコの臭いを口實に自室に引き下がれると思つた斎子は謝られきつかけを失つた。

「スサノオの須賀神社さ、神主つてだれだ?」

「チョーメイさんよ。喜代沢ナガアキラ……」

「なにツ、ナガアキラ? じゃ、息子はモトアキラつて言わないか?  
?」

「喜代沢さんを知つてゐるの? 名前まで知らないけど息子さん、東大に行かれたのだそうよ。アタシ、一度しか会つてないけど、ほら、春香が盲腸で、あなたが交通事故のとき。可愛い坊っちゃんだったけど、ハンサムで立派な青年になつてるんでしょうねえ。何たつて東大が魅力よねえ。春香を、うつん、アタシをもらつてくれないかしら、あつはつは」

「バカツ。冗談にもそんことは言つなツ。どだい東大が何だつてんだツ」

「どしたのよ? アタシ、あなたが三流私大だなんて一言も言つてないじやないのオ」

「お前、ケンカを売るつてのかツ」

「あら、アタシ、部屋に帰つたほうがいいの?」

摂夫にいやな思い出がよみがえった。担任こそもたなかつたが、喜代沢長明の息子、素明に化学を教えたことがあつた。素明は数学も物理も化学も学年でいちばんの秀才だつたが、摂夫がほめても少しもうれしがらなかつたし、理系への進学を熱心に勧めたときには「当たり前の理屈を有り難がるつもりはありません。ボクは宗教家になつて人々の役にたちたいと思っています」と見事に突っぱねられた。摂夫は素明の「当たり前の理屈」という言い方に、自分の化学知識までバカにされたようで、素明のことを憎たらしいガキだと大人気なく腹を立てた。

「……どうか。アイツの親父だつたのか、くそつ……。

「治つた人はみんな同じお祓いをしてもらつたんだな?」

「そうよ」

「どんなお祓いだつたんだ、それ?」

「普通のご祈祷でしょ。別に変わつたものじゃなかつたと思つけど

「普通のお祓いなら普通のご利益しかないだろ? 瘡や子宮筋腫まで治るとこからには尋常なお祓いではあるまい?」

「そうかなあ?」

夫が信じてくれそうもないのがわかつてゐる斎子はとぼけた。

「靈験あらたかな御神水とか言われて、変なものを飲ませたつてことはないか?」

「そんなのなかつたわよ

「……病氣の種類がまちまちなのに六人そろつて完治つてのもわからぬ。病巣を物理的に摘出したなら喜代沢は医事法違反だ。薬を使つたなら薬事法違反。化学物質の薬効でないとすれば何で病氣が治る? 病は氣からとは言つても氣力で癌の病巣がなくなるか? 偽薬? いや、斎子は何も飲んでいない。こいつの身体に触れずにコバルト照射にまさる氣力がお祓いから生まれてくるとでもいうのか、わからん……。」

「お前、神主のお経で眠くなつたとかおかしな気分になつたとかは

？」

「あはつ、神主のお経はよかつたわね。そり言えば……」

「やう言えば、何だツ？」

「つまく言えないけど、畠希子さんのときも久枝さんのときもそういう  
だつたつて言うから……」

「じらすな、何なんだ、その共通したものは？」

「（）祈祷の後半で夢を見たような気分になつたわ

「どんな夢だ？」

「身体がこう浮きあがつてさ、アタシはゆつたりした感じなのに外側がもの凄いスピードで動いているらしいの。それが妙にまぶしい所に向つて進んでいく。頭は何も考えてなくて、不安もなくて、そのうちにすつごく気分のいい高波が何度も打ち寄せて来てさ、それにさらわれて行くの。思わず大声をあげたくなるよう大波ね。やつたことないけどサーフィンみたいな感じのかなあ。気分がぐう一つと高揚したかと思うと次には安心感の中で癒されてて、それがくり返されてどんどんシーウセなうねりが続くの。アタシをつなぎ止めたものがゼーんぶ外れてさ、そのまま宇宙の果にスウーッと……」

……催眠術だつたかバカらしい。いや……。

摂夫はフロイトの『夢判断』くらい読んでおけば良かつたと思つた。

「その夢に何かモノは出でこなかつたか？ 鉛筆とか包丁とかホウキとか。その夢の中の移動手段は口ケットだつたのか？ サーフボードだつたか？」

「口ケットなのがなア。炎の柱のようなものに跨がつていたような氣もするけれど、やっぱりわからない

「炎の柱に馬乗りに？ 火傷するだろ？」

「夢の中で火傷して目が覚めたら薬を塗るのオ？ アーハッハッハ、バカみたい」

「お前、お祓いの文句は解つたのか？」

「チンパンカンパン。でも心にビンビン響いてた。あれって五感への刺激じゃなかつたと思うわ」

「お前、気はたしかだつたんだろうね？」

「夢の中で覚醒している自分に気づけて方が無理じゃないの」「サッパリわけがわからん」

「それはそうと、アタシを呼んどいて、あれはするの、しないの？」

「もう少し考えてみないことにはな。今夜は別々に」「何なのよ、それツ！ もう、頼まれてもさせてあげないからねツ！」

斎子はブイツとつむじを曲げて寝室を出た。

## (八)

摂夫は考えた。

……おかしいじゃないか。刺激もされないのに刺激反応が起つて、それが記憶されている？ そもそも原因がないなんてバカな話があるか。ん？ 化学物質が神経を直接に刺激するつてことはある。でも斎子は何も飲まされていない。物理的な刺激で内分泌のような生理的反応を促すということはできるのかもしれない。それが今度は別の感覚器官につながる神経を刺激する。するとそれで幻覚を見せることも出来るつてわけか。ああ、頭が混乱してきた。斎子のやつ、いつたい何でそんな夢見心地になつたんだ？ 夢見心地恍惚感。物理的刺激によるエクスタシー？ 大声を出したくなるような波？ 炎の柱……。

堂々めぐりの摂夫の頭に、突如、経験したことのないどす黒い疑念が噴き出した。彼は何度か深呼吸をして冷静になろうとした。

……ま、まさかッ、斎子がヒヒ爺に？ 難病が完治したのが女ばかりといつのも臭い。なんてことだッ。素明の親父はいつたい何才なんだ？ あいつが高一のときにはもう七十の手前だつたんだからな……。

摂夫はベッドの上に胡座をかけて頭を抱えこんだ。自分の推理がどこかで誤つていてほしかった。自分の考えたことを忘れたいと思った。

真夜中過ぎの廊下を書斎へもどる途中、摂夫は春香の部屋のドアをノックして開けた。春香は机に向かつたままキヨトンとした顔を父親に向けた。

「ずいぶん遅くまでがんばつてゐるんだな、何か持つて来てやろか?」「いらないよ、もう終りだもん。それより、お父さん、顔色よくないよ。どうしたの?」

「いや、何でもない。あまり無理することはないぞ。受験の基本は学校の勉強だからな。じゃ、おやすみ」

ドアを後ろ手に閉めると摂夫の目から涙がこぼれた。彼は書斎の椅子に座つて、うつうつと泣いた。……これから巣立つ娘があるといつのに家庭が壊れてしまつた。あいつがウチを壊したのだ。神主どころか悪靈だッ。いや、俺は靈なんか信じやせんぞ。喜代沢のくそ神主めつ、ただでおくかッ……。

しかし、摂夫は一しきり喜代沢長明を罵ると、今度は無言で自分を罵つているのだ。

……斎子を放つたらかしにした罰ちばでも下つたか。いや、罰なんて訳のわからないもんを信じちゃいけないが、癌に氣づけなかつたうつかり者だつたことはたしかだ。乳癌を宣告されて行き場のなくなつたあいつが、春香のために、俺のために何とか治らうと見えない力をたよつてあのくそ神主と……。ええい、くそつ。あの喜代沢のくそ神主めが。俺の斎子に何てことをしてくれたッ。斎子、なんでこんなことになつたッ! ええい、くそ神主め。今に見てろよッ……。

摂夫は書棚の下の引出しからサバイバルナイフを取り出した。飲み過ぎた彼の眼はすわつていた。彼はサックをはらつて思い切りナイフを机に突き立てた。

翌朝、摂夫はひどい一日酔いだった。

学校に欠勤の電話を入れて、ダイニングで昆布茶をすすつた。

「ついぶん飲んだのね」

「こともなげにそういう斎子の尻の辺りを見て、摂夫は無性に腹が立つた。機嫌の悪いのを一日酔いのせいにして、やたらと昆布茶を飲んだ。飲み過ぎた喉はそれをほしがつた。前夜は喜代沢長明を殺してやるつと本気で思つたが、一夜明けてみると、家庭崩壊を世間にさりすよつた事件は起こせないと想いなおしている。しかし、あの悪夢のような推理が本当なら、摂夫の生きて来た四十五年でこれほど屈辱もないのだった。

「おい、斎子。ちよいと散歩がてら須賀神社へ行かんか？」

「え？」

「乳癌のお礼詣りがまだだろ？ 僕もちょっと確かめたいことがあるしな」

「それを言つなら、お詣りがてらに散歩でしょ。実はどうしか迷つていたの。お礼があまり少なくてナンでしょ？ 亜希子さんにでも聞いてみようかと思つてたところなの。額が大きくなればあなたとの了解がなきや困るし、それにここんとこのアタシたちはそんな雰囲気じゃなかつたでしょ」

「お礼ならお前が好きなだけ包んだらいいさ」

斎子には夫が素直にお礼参りするとは思えなかつたが、いつの間にか手回しよく礼服を羽織つているのを見て、恰好だけはつくだろうと自分も出かける支度を始めた。

大通りを須賀神社に歩いていく一人に後ろから武山亜希子が声を掛けってきた。

「朝からおそろいでお仲がよろしいんですね、ほほほ」

「あら、わちらこそじや」「わこません？」

摂夫は武山源次に、会釈し、ちょうど都合のいい所で会えた、と付け足した。源次は摂夫より「才年上の造園業者で、二人は父親参観日に話して面識があった。

「ここの私に話？ それはまた。で、田所先生は今日はどちらへ？」  
「須賀神社にちょうどいと。それが夕べ深酒をしましてね。出るには出て来たんですが、酒臭いまま神社に踏み込むのもどうかと考え直そうと思つてるところです、ははは。で、源次さんは？」

「じらんの通り、カミさんのジョギングにつきあつてているだけですよ。午後はデパートに行くと言つてたですが、そつちは断ります。内緒ですが、ここの競馬がやけについてましてね、ヘッヘッヘ」  
女どうし、男どうしで話が始まつた。摂夫は武山を少し離れた所に誘つて小声で話しだした。

「実はですね、身内の恥をせらうにやならんですが、これは源次さんちとも関係なくはないと思つたんです」

「…………？」

「奥さん、乳癌だつたのじゃないですか？ いや、ウチもそつだつたんですね。今はああして一人ともピンピンしますがね、どうして治つたんだと思います？」

「そりや下山病院で……」

「手術をされましたか？」

「いや、それはなかつたですね。早期発見できたおかげで薬だけで済みました」

「じゃ、やつぱり「存じない」のですね？」

「どうこういことです、いつたい？」

「昨日の、それも夕方の話です。下山病院の院長が、一、二年前から急に乳癌やら子宮筋腫やらが治つてしまふケースがあつて、原因がわからないと当惑していたのです。私も家のレントゲンを見せてもらいましたが、病巣がハツキリ写つているんですね」

「先生はウチのやつのもさうだったと言つんですか？」

「奥様の下の名前は亜希子さんつていいましたよね？」

「そうですが、なにか？」

「イニーシヤルはAですね。四十五才ですか？」

「私と同じ年の四十七です。先生、いつたい何なんです、これは？」

「では、病院にかかりたのは一昨年でしたね？」

「よくわかりますね」

「写真の入った家の封筒に「S・T、四十五才、女、ブレスト・C」とマジック書きしてあつたんです。そして同じ封筒に「A・T、四十五才、女、ブレスト・C」とありましたのでね、ひょっとしたら源次さんとこかなと思ったんです。家内があなたのところも乳癌が治つたと言つてましたから」

「何ですね、そのブレスト・Cてのは？」

「乳癌だと思います。いや、治つたのだから万事めでたしというのなら、こつから先の話は差し控えますが……」

「気になる言い方ですね」

「問題は治り方なんです。癌の病巣がいつぺんに跡形もなく消えてしまつもんでしょうか？　いや、あの封筒が奥様のものだとすると、乳癌はかなり進行していただと思われます。家のと同じケースが前にもあつたと言つて見せた封筒だつたですから」

「じゃ、田所先生はなんで治つたのだと？」

「お祓いです」

「ええッ？　アーハッハッハッ。先生も人が悪いなあ、そんな冗談で人を担ぐなんて」

「ぼくだって冗談であつてほしいですよ」

摶夫が院長とのやりとりを再現してみせると、源次の顔から笑いが消えていった。

「で、そのお祓いってのは？」

「須賀神社の喜代沢長明という神主の祈祷です。これがどうにもうさん臭いというか、いかがわしいというか……」

「そこの須賀神社ですか？　ウチのやつは乳癌で一騒動してからあそこに通つてます。いかがわしいと言われては聞き捨てなりません

ね

「宗教がどんなものか、喜代沢なる神主にどんな靈力があるのか知りませんが、その祈祷には肉体交渉が含まれているフシが濃厚です」汗のひいた顔を首にかけたタオルでしきりに拭っていた源次の血相が変わった。

「な、なんだつてッ？」

摂夫は昨夜酔った頭で考えたことを彼に告げた。

「わ、私らは女房を寝取られたつて言うんですかいッ？」

多血質の源次は自然と声が大きくなつた。

「しつ。二人に聞こえますッ。残念ですが可能性は極めて大です。ぼくは何としても腹の虫が収まらないもんで、お礼詣りのフリをして確かめに行くところなんです」

「あのアマ、トンデモネエことをしでかしやあがつて。ブツ殺し……」

「いや、ぼくは源次さんの奥様のことはわかりません。ぼくの家内がしゃべったことをつなぎ合わせてこんな結論になつただけですかう……」

源次の息づかいがハアハアと荒くなつた。

「でもウチのやつは保険がきかないと言つて、たしかぶ厚い封筒を……」

「癌の特効薬はまだ出来ちゃいないですよ。それが喜代沢への謝礼にまわつたとは考えられませんか？」

「先生ッ、この話、一枚噛ましてください。で、どう仕返しするつもりですか？」

「ぼくだつて若い独り者だつたら何をしていたかわかりません。いや、若くなくなつて……」

摂夫は内ポケットのナイフを礼服の上からたたいた。

「ここに少し物騒なものを持って来てはいます。でも、源次さんもそうですが私たちには家族もあれば立場もあります、新聞ダネになるようなことはできません」

「女房を寝取られて、泣き寝入りは出きねえよ、先生ッ」

「訴訟を起こそうにも証拠がないんですよ。まさか癌が治つたでは証拠にならんでしょう?」

「なに言つてんですか、強姦は親告罪ですよ。被害届けを出しましょ!」

「警察まわりの新聞記者の餌食になりますよ。世間に恥をさらすことがあります。何よりお宅の亜希子さんもウチの斎子も親告はしませんよ」

「じゃあどうするんです? H口神主を見逃すんですつてんですかツ!」「

「相手は海千山千で簡単に尻尾は出さんでしょ!。口惜しいけれど、喜代沢長明に事実を認めさせて一度といつしたことのないよう謝罪させるしかないと思うんです」

「そんな生ぬることで気がすみますか? 女房を寝取られてんですよ。腕の一本もへし折るとか、慰謝料のたとえ何百でもふんだくつてやりましょうよツ」

「気持ちはわかりますが、源次さん、じうじうください。ウチの場合ほぼ間違いないのです。ぼくが冷静に話を進めますんで、神主が事実を認めたときに、きやつの腰が抜けるほど涙んでやつてくれださい。これは小道具として渡します」

摂夫はズシリと重いナイフを武山源次に預けた。

男ふたりの話がまとまって、摂夫は武山夫人と談笑中の斎子に声をかけた。

「武山さんの奥さんなあ、デパートに行かなきゃならんそうだ。お引きとめするのはそのくらいにしろよ」

摂夫は武山夫人に言った。

「奥さん、ちよいとお力添え願いたいことがありますてね、一時間ほど」主人をお借りできますかね?」

「あんな者でお役に立つんでしたら、ははは、じうや!遠慮なさらず」

「亜希子ツ、田所先生のお伴だ。一時間ほどで帰るからよ、出かけるんなら昼メシの支度をして行けよ。いいなツ」

源次の亜希子を見る日は前よりずっと険しくなっていた。

斎子がヒジで摂夫の脇腹を小突いて小声で聞いてきた。

「あなた、どうして武山さんを？」

「オブザーバーだよ。俺たちの話を聞いてもらつ。ま、いいから

……やつぱりただのお礼詣りとは様子がちがうわ……。

## (一〇)

拝殿に昇った男二三人女一人の前に、笏<sup>しゃく</sup>を持つ束帯すがたの喜代沢長明が現れた。

「神主さん、今日は家内とお礼に伺いました」

喜代沢はにこっと微笑んだ次の瞬間、目を見開いて顔を強ばらせた。ジャージ姿の源次がサックのついたサバイバルナイフをこれ見よがしに握っていたからだ。

「そういうものはしまっておきなされ。ここでは用のないものだ」  
源次はヘツヘツと笑いながらもつたいをつけてナイフを脇に置いた。

「あんたらのお知合いか。変わった人だの」

喜代沢が聞いたが、摂夫はそれに答えなかつた。

「本日はお礼詣りの他に確認せねばならぬことがあつて伺いました

「何か？」

「実は、先日、家内を診察した医師のところに参りました、つかぬことを聞かされましてどう考えたものかと……」

「何を聞かされたと？」

摂夫の思いもかけぬ言葉に斎子が礼服の袖を引っぱつて夫を制した。が、摂夫は止めなかつた。

「医師は、家の乳癌が一瞬といつていいほどの間に、跡形なく消えたと言います。医学の常識では考えられぬと言つておりました」

「ふむ」

「私もあれこれ考えて、あなたの祈祷の他に家の乳癌を治したものではないと結論するに至りました。しかし、私にはどうしても祈祷で癌が治るとは思えんのです。確認というのはそれです」「ふむ。たしかに。ワシのお祓いで癌が消えるくらい珍しくもないが……」

「私も自然科学の一学徒として、癌を瞬時に消滅させる祈祷がどんなもののか見届けて来るとその医師に約束したのです」

「ふむ」

「ふむ、ふむ言つてんじゃねえよッ、偉そうにふんぞり返りやがつて。やいッ、このクソたれ神主ッ。俺の女房に何しやがつた。サッサと白状しやがれッ」

突然の源次の罵声に、斎子の顔からサアーッと血の気がひいた。歯の根がかみ合わない口に片手を当てて横坐りのまま後ずさった。後ずさつたあとが濡れていた。源次はもう老神主の首をへし折らんばかりの勢いで、摶夫がやつとのこと後ろから抱きついた。それでも老人は泰然としていた。

「騒がしい男だな。この男の女房にもワシが祈祷を受けたというか？」

「あんなことを誰彼みさかいなくできるなんてなあ、犬畜生だッ。叩つ殺さてえか、盗つ人神主めッ」

摶夫は源次がタイミングを早まつたと思ったが、もう後へは退けなかつた。

「俺の目の前で、家内にもう一度同じ祈祷をして見せろッ。おまえには拒む権利はないぞッ。さあ、やれッ！」

まさかの夫の大声に斎子はその場に気絶した。

「よからう。が、その前にひとつ、田所さんと言つたな、お前さん聞いておく」

「何だッ？」

「女房どのにまだ具合の悪いところがあるか？」

喜代沢長明の語氣が少し強くなつた。

「悪びれもせずに、こいつは平然と何を言いだすのだ……」

「ワシの質問に答える。その後、お前さんの女房どの具合はどうかと聞いておろうがッ」

「…………」

「なぜ黙つておる。都合が悪いと耳が遠くなるのか。医者がサジを投げたお前さんの奥方の容体が今はどつかと訊いておるッ……」

「…………」

「何事もないのだな。モヘンゼニ息災モヘンゼニであれば祈祷の必要はない。須賀神社があるのは人助けのためだ。お前さんらレー」ときに試されるためではない。日照りがつづけば雨乞いをする、雨がつづけば洪水が出んように祈祷する、旅先に不安があれば凶事のふりかからんよう祈願をする。六、七年前だつたかお前さんが交通事故を起こしたとき、車にウチのステッカーが貼つてなかつたろ？ 祈祷はな、人助けさ」「詭弁だッ。お前の祈祷にやましいことがあるから出来ないんだッ」

目を覚ました斎子が割り込んだ。

「ガンが治つたんですッ。あつたはずの骨への転移も見当たらない、まるで時間が逆行したみたいだと不思議がつっていました」

「つるさいッ、おまえは黙つてろッ。お前はこのジジイが治してくれたと本氣で思つているのかッ。こいつは神主面をしてお前をもてあそんだんだぞッ！」

「やめてッ！ やめてよッ！ 神主さまはアタシの命の恩人じゃないのッ……」

「このワシがお前らの女房を弄んだと言つた、ふむ。どう言えればお分かりになるか。あれはああせんことにはだな……」

老神主が言い終わらぬうちに、源次がズンと鈍い音をさせて大きなナイフを床に突刺して立ち上がつた。

「そうち白状しやがつた、この間男神主めッ。ただじやおかねえッ。落し前はつけてもらうぞッ」

「武山さんも止めてよオ。神主さまに何てことをツ

「奥さん、目を覚ましなさいよ。」主人に申し訳ねえと思わねえんですかいツ！」

「ねえやめてよ、あなたツ。『』祈禱を不貞だと言つならアタシを離婚してちょうだいツ」

斎子がヒステリックにわめいて泣きだした。

「どつちもどつちだが、お前さんの方が話がわかるう。女房どのはあなたの持ち物か？」

「当たり前だ、れつきとした戸籍上の配偶者だツ」

「配偶者は身分で、所有物ではなからう」

「ツベコベ言つなツ。斎子は俺の家内だから俺のものだツ」

「ならば……」

喜代沢が摂夫をにらむ眼に力がこもり、耳がジンと痛くなるよつな神鳴りが本殿を揺るがした。

「乳癌くらい、お前の手で治してやれいツ！」

「…………」

しばらくの沈黙の後、神主はまた穏やかな口調にもどつて一人の男に言った。

「なア、女房も亭主もさ、お互ひを自分の持ち物だと思うから僅かな過ちにも腹がたつ。しかし、よう考えてみい。己の自由にできない人間の命とはだれのものか。お前さんのもんでも、医者のもんでもあるまい」

「…………」

「その人間どうしが都合をつけあつて生命を大事にすることがどうして過ちだよ。医者をはじめ世間はワシらの道理を分かつとらん。田所さん、それはお前さんも同じだ。その意味では氣の毒だつたかも知れん。いいか、ワシは逃げも隠れもせん。訴えて出るなり何なり好きにするがいい。人間がひねり出した裁判所の裁定などワシはどうでもいい。慰謝料を払えというなら払つてやる。しかし、女房どのはワシに強姦されたと言つたのかツ？」

「…………」

喜代沢の口ぶりは憎らしいほど自信にみちていたが、不思議に自慢のよろこびには聞こえなかつた。

「ワシにはお前さんらが金を強請つてよろこぶとは思えん。可愛い女房が古狸にたぶらかされ、弄ばれた腹いせに来たんだろ？。ワシは女たちを抱かなかつたとは言わん。しかし、自分の女にしようと思つて抱いたのではないことぐらいは理解しろッ。おいッ、植木屋ツ。おまえの女房のときも同じことだ。お前らの女房は一度も三度もワシに抱かれたと言つたか？　え、そこは確かめなかつたのか？」

「…………」

「女を養うのはよ、金でも地位でもない、ましてや男の面子などであるものか」

摂夫は身体から力が抜けていくのがわかつた。

「なら、そいつは何でえ？」

源次にはまだ声を出す力が残つていた。

「労りだよ。情愛というものだよ。お前にそれがあれば、女房たちとてワシを頼つてなど来やせん。亭主にすがつたまま息絶えられるなら女としては冥加の利益だ。その方が幸せだつたかもしれん」

「…………」

「科学の探究もよい、その知識を生活の手段にするのも悪くない。しかし人間に明かされていることの何とわずかなことかよ。それつぱかりのサル知恵でこの頃の人間は生きて行かねばならんのだから、たまには神も仏もないと思うこともあるさ。よく聞け、今のお前たちはワシでなく、女房を寝取られた己の非力さに腹を立てているだけだ」

「何をツ、わけのわからぬえ事を抜かしやがつて」

「先ほどからお前はどうも人の話を聞いておらんな」

喜代沢は正座をしたまま膝を三十度ばかりずらして源次と向きあつた。

「試したことはないがよ、ふふふ。ワシの祈祷でお前を殺すくらいわけないんだぞ」

「お、脅そつてのかッ。薄つ気味悪い笑い方はよせッ」

「ワシが祈る。素戔鳴尊が聞き届ける。お前の身体はすぐさま変調を来す。脂汗を流しながら三日も寝込んで、そのままあの世行きだツ」

「あーっはっは。爺イ、モウロクしたか。俺を殺せば警察に捕まつて監獄行きだツ。その年で臭えメシを食いてえかッ」

「たわけッ。死んでいくお前がワシの心配などするなッ。おまえを殺してもワシは捕まりやせんのだ。どうだ、口惜しからう、あつはつは」

「なんだと?」

「証拠がないんだよッ。お前の死因は検察医にも分からん。呪い殺すことは科学的であり得ないと日本の法律がそう決めてある。だからワシがお前を殺しても罪状もつかんし起訴もされん」

「人殺しが図々しいぞッ」

「法律だから仕方ないな、あつはっは」

「何てこった」

「素戔鳴尊の力は生命を救う力だ。それが生命を奪うくらいのことが出来なかろうはずがない。法律が認めようが認めまいが、神通力というものは、ある。ワシら神主は人助けはしても人殺しはせん。殺人の例がないから裁判の判例がない。祈祷による殺人は法律では扱えんのさ」

「もつと分かりやすく言えッ」

「宗教てのはお前さんらの常識や学問とは別物つてことだ。人間はどうにもならんものは他人にたよる。知識だ技術だという力をもつた他人にたよる。人間はそうやって都合をつけ合うのさな。しかし、医者がサジを投げ、弁護士がソッポを向いたらどうする、おまえは死ぬか? 人間があいそれと死ねるかよ」

「そこがおめえらの出番だろガッ」

「ふむ。どうにもならないときは己を超えた力にすがるしかない。

宗教はそんな非力な人間の心に芽生えるものだから教え事ではない。

見えんものは無いというのが常識の「ご時世だから、ワシシらはうさん臭いインチキ手品師くらにしか見られてない。医者や弁護士は役割どおりの結果を出すからアテにされる。ワシも医者だつたらと思わんこともない。しかしながら、女たちが常日頃アテにしておるのは医者や弁護士ではないぞ、大黒柱のおまえら亭主だ。その亭主の支えがアテにならんから女たちは不安になつてすがりつくものを求める。女たちが医者を通り越して半気違ひのワシに祈祷をたのみに来る。責められるのは誰だ。お前らがしつかりすればいいことだッ」

摂夫はうなだれた。源次はウーツと喉を鳴らして目を白黒させた。  
「田所さんな、やり直すなら女房どのを見直せよ。それだつてお前さんの命のあるうち、斎子さんの命のあるうちさ。寿命なんて誰にも分かりやせんのだから」

源次はいつの間にやら姿を消していた。

## (十一)

家への帰り道、夫婦は無言だった。

斎子は喜代沢長明がこんな形で真相を明すとは思つてもいなかつた。自分が告白しなければ夫には知られないと思っていた。明らかになつてしまつたことの大きさにうろたえるだけで、先のことを考えようにも考へがまとまらない。頭の中を離婚の一文字だけが駆け巡つた。遠くない将来に別れることになるだろうが、春香のことを思うと心が痛む。娘には氣の毒でも、いつそ運命だつたと癌で死んだ方ほうがよかつたのかもしれないとまで考えた。

摂夫の心も重かつた。悪夢が現実だつたという衝撃というよりは、自分の手で突き止めた原因がこれから斎子にどう対処すべきかの答を迫つてきたからだつた。事態は妻と喜代沢を責めて解決する段階を通り越して、自分の在り方の問題に変貌していた。

斎子が夫の前にまわりこんで顔をのぞいた。

「あなた、この先どうするの？」

「考えている。考えなきゃならん……」

摂夫はそう言つたきり口を噤んだ。

それからの摂夫は、書斎に引きこもり、斎子と顔を合せる食事を避けるようになった。朝には仕事に出ていくが、連日のよつに酔つ払つて帰ってきた。いちいちの動作が荒っぽく投げやりで、絶えずいら立つてゐる。斎子が気づかつた言葉をかけても迷惑そうな顔をブイと横に向けてしまう。会話の絶えた夫婦に気まずい時間ばかりが過ぎていった。

夫が閉じこもる書斎は出入り禁止になつて、斎子は洗濯、食事、家中の掃除をしかやることがなくなつた。摂夫は何日たつても別れ話を切り出さなかつた。かつて斎子を愛し、彼女の方からも愛した男は離婚届を突きつけて他人にならうとさえしなかつた。乳癌で失う命を取り留めたというのに、その甲斐もない形だけの生活が続いた。

……喜代沢は原因が俺の来し方にあると言つた。あいつの言うことがまんざら外れていないせいで俺は腹がたつのか。たしかに俺はいつからか斎子を居て当り前の女だと思つて來た。俺を裏切る女だと思ったことなど一度だってありはしなかつた。俺は斎子に安心しきつていた。その安心は無意識の信頼で、人間はだれだつて安心したいのだ。改めて意識しなければ信頼は消極的にしか見えない。でも、俺に愛情がなかつたとは言えないぞ。それをあの男は、人間の本質には必要に迫られないと知り得ない部分があつて、そこを俺が見過ごして放つたらかしたのだと言いやがつた。斎子の上つ面しか見えていないと言いやがつた。大きなお世話だ。そんなことが俺の信頼を裏切つていい理由にはならない。何よりあの古狸は当事者だ。女房を寝取つたうえに説教まで垂れやがつて。俺としたことがまんまと言いくるめられたつてわけか……。

そんな堂々巡りがつづいて一ヶ月ほどした頃、摂夫は中間試験の答案を探点していてがく然とした。生徒たちの出来が悪すぎる。彼

は舌打ちしてつぶやいた。……化学式と計算ばかりだから、出来ない生徒が出るのも当たり前……。

生徒の出来の悪さを教科のせいにしたその一方で、斎子のことには頭を占領されてまともな授業が出来ていなかつたのではないかと気が弱く反省もした。彼は授業の田先を変えて、科学者の伝記からエピソードのひとつも紹介してやろうと考えた。書棚から引き抜いたマイケル・ファラーテーの『ひうそくの科学』に次のようにあった。

当時すでにイギリス王立研究所教授として名をなしていたファラーテーのもとに、世界各地から若い研究者が集まっていた。ある日、ファラーテー先生はわずかな量の液体試料を試験管に取り、研究者たちに分析するように命じた。しかし、化学に自信のある研究者たちが何度も実験をくり返しても田ばしいものが何ひとつ出でこない。こんなはずはない……。若い研究者たちはとうとうファラーテー先生にお伺いを立てた。「先生、この試料はただの水です。検出されるのはわずかな塩分だけです。私たちの実験は失敗だったのでしょうか?」「いや」と先生は答えた。「それは最愛の娘を幼くして失つた若い母親の涙です」

……いい話だな。科学は未知のものに謙虚でなければいけない。でも化学を勉強したからつて無感動人間に思われちゃたまつたもんじやないからな。生徒も俺の感じたと同じものを感じてくれれば……。

摂夫がメモをとつて構想をまとめていくといろへ高校に受かつてうれしさを隠せない春香が入つて來た。

「お父さん、ごはんッ！」

ダイニングに行くとテーブルには春香の合格祝いの膳が並んでいた。

「春香、おまえが高校で勉強できるのはお父さんのおかげなんだからね、ちゃんとお礼を言いなさい」

斎子は言つたが、心には途切れぬ雲がかかっているようなくぐもつた声だ。

摂夫は食事をすませた。

「斎子、おまえ風邪でもひいたか？」

それだけ言うと彼は食器を重ねて席をたつて行つた。

斎子は重ねられた食器を見つめて大粒の涙をボロボロとこぼした。……ありがとう……。

彼女は夫の一ヶ月の苦悶の跡をそこに見た。……癌を治したい一  
心とはいえ迷つたのはアタシだ。アタシのしたことは「婚姻を継続  
し難い重大な事由」だった。夫がそうすると言えば離婚は止むを得  
ない状況だった。それを夫は踏み止まつたのだ。苦しかつたでしょ  
う……。

「お母さん、どうしたの？」

「うれしいのよ」

「そう、私、うんと勉強するねッ」

「そうね、頑張るのよ、春香」

斎子には夫が言つていたように、自分にはもともと乳癌などなか  
つたようにも思えてくるのだった。

(十一)

夫婦に平穏な日々がもどり、一人のお互いに対する愛情は以前に  
もまして細やかになり睦みあうようになった。二人とも乳癌のこと  
は忘れてしまつたかのように口にしなかつた。家族に三年の歳月が  
何事もなく過ぎて、春香は八王子の薬科大に進学することになった。  
制服を脱いですっかり女性らしくなつた春香を見送りに両親は上  
越線沼田駅のホームに立つていた。

春香が一人前の口をきいた。

「お母さん、お父さんのためにも少し瘦せたほうがいいわ。お父さ  
ん、お母さんの言つことをちゃんと聞くのよ、わかってるわね？」

「春香、何事も自信を持たないとな、思つた成果はでないもんだ。しかし、過信するとミスに気づかず失敗する。勉強も人生も簡単じゃないな。ま、とにかく頑張ることさ」

摂夫も父親らしくはなむけの言葉を言った。

「うん。田所春香、志を立てて郷閑を出づ。学もし成らすんば、なんてネガティブには考えないッ。あつはつは」

「元気なのはいいけど、おまえの一人暮らしってのは危なっかしいねえ」

「ドンマイツ！　すぐに根性のありそうな友だち見つけるから」娘の列車が見えなくなるまで見送つて、二人は一人つきりになつた。

「あの娘がひねくれずに育つてくれたのは有難いわ。でも、さびしくなるわね」

「俺たちは俺たちで楽しみを見つけるさ。まだまだ老けこんじゃいられんよ」

摂夫は五十一才、斎子は四十八才になつていた。月日は平穏のうちに過ぎていくよつに思われた。

「なんだつてツ！」

摂夫は耳を疑つた。斎子から妊娠したようだと告げられたのは晴天のヘキレキだつたとはい、彼には身におぼえのあることで、彼女が身ごもつたのは彼の子に違ひなかつた。

「まだ何とも言えないけど」

「更年期の生理不順つてことはないのか？　なんで茶碗を伏せなかつたんだよ、まったく」

斎子は摂夫が食器を重ねるたびに受入れて拒まなかつた。春香につづけて子供が欲しかつた斎子には茶碗はどうでもよかつたし、摂夫が妻の排卵期を覚えているはずもなかつた。つまり、いつ妊娠しても不思議でない期間が十八年あつただけのことだった。

斎子は未確認の妊娠を離婚の危機を乗り越えた夫婦を神さまが祝

福してくれたのだと手放しで呟くんだ。

「はつきりしたらさつそく春香に知らせてあげなきゃね」

「何をのんきなことを言つてるんだ。おいッ、冗談じゃないぞッ」

性格とこゝのはつくづく変わらないものだと摂夫はため息をついた。斎子と結婚したのも、細かいことばかりが気になる自分と正反対の、彼女の大らかさに惹かれてのことだったが大らかさとダラしないときはイコールではない。

「都合の悪いことなんて一つもないでしょ？ 春香がいなくなつて寂しくなつたところだもの、ちょうどいいわ」

「どじがちょうどいいんだ。じつこののはお出産度とは言わないんだ。まつたく信じられん」

「よひこんでくれないの？」

「春香はもう大学生だぞ。おまえ、いくつだよ。高齢出産が危険なのは常識じゃないか。何でまた……？」

「アタシなら実年齢よりもずっと若いし、いたつて丈夫よ」

母体の健康もなげなかつたが摂夫は世間体を考えると気が重くなつた。……早い夫婦なら孫がいてもおかしくない年齢だ……。

「どじにかならないかよ。世間じやみんなそうしてるんだから、な？」

「アタシ、産めますよ」

「産めるだらうけれど、恥かきッ子だつて笑われるぞ」

「何てこと言つのッ！ 神さまが祝福してくださつたものを」

「そうには違ひなからうが、その……」

「夫婦に子供が出来てどじが恥よッ。そんなふうに考へるあなたのほうが恥ずかしいわッ」

「しかし世間じやあな……」

「何よッ、世間だの常識だのって。常識なんてこざとなつたらアテにならぬくらい常識よ。世間のほうが間違つてることなんかいくらだつてあるんだからッ。亜希子さんも久枝さんもきっと口惜しがつて羨ましがるわ。女なら誰だつていくつになつたつて産みたい

ものよ」

「羨ましがるのは表面だけさ。腹じゃ俺たちを年甲斐のないバカ夫婦だつてせせら笑うんだぞ」

「笑いたい人には笑わせておけばいいわよ。アタシのお腹に愛する人の赤ちゃんがいる……このうれしさは女にしか分らないわよ」

「斎子から愛する人と言われてドキッとした。深く長いため息をついた。……俺が斎子を愛している？ 斎子に子供が出来るようなことをしたのは俺があいつを愛しているからなのかな……」

一人して深田伊産婦人科に診てもらいに行くと、斎子の胎児は十四週目で順調に育っていた。春香を取りあげた初代の院長は現役を退いていて、息子の代になっていた。一代目院長は眉根にシワを寄せた。

「出産はお勧めしません。高血圧が心配です」

「高齢出産は母子ともにリスクが高いと常識的なことをぐどぐどと言われた。」

「もう一度よく話し合われた上でまた来院してください」「医者の言葉はていねいでも、墮胎手術なら引き受けますというのだ。斎子は別の医者を当たつてみると言つたが、摂夫は黙っていた。「医者が何百人、何千人の妊婦を診てきたか知らないけど、アタシにはこの一回なんだから」

二人は帰宅して話し合つた。

「墮ろせといふの？」

「今までずつと三人だつたんだ。子供が出来なくて今までと変らないじゃないか。おまえに間違いでもあつたら俺が困る。なにぶん医者の言つことだしデータがそつなんだから、おまえを危険な目に遭わすわけには行かない」

「だいじょうぶ、素戔鳴尊さまがついているから」

「摂夫はドキッとした。

「おまえ、まだあの神社に通つてるのかッ！」

「命を助けてもらつておいて、喉もと過ぎたら感謝もしないなんて罰当りは出来ないでしょ」

斎子は産むと言つて譲らなかつた。意見が分かれた。

……またスサノオさまか。済んだことだと決着をつけたつもりでいたが……。苦しんで、踏ん切りをつけて、やつとここまでこぎ着けて克服したつもりでいたが……。あのときの俺は、ライターや万年筆のように馴染んだものへの愛着から斎子と離婚するのが惜しかつたのか、それとも過ちを犯すこともある生身の女として再び斎子を愛し始めたのか。よく分らない。たぶん両方だ。俺はひとまわり大きく斎子を包もうと努力はして来たつもりだが、やはり世間を恐れて離婚を恐れいでだけか……。

摂夫はまたスサノオに打ちのめされるのかと思つと自分の非力が情けなかつた。

「斎子、今は神話の時代じゃない。優生保護法は現代の常識だ。ごく普通の夫婦が母体保護のために人工中絶するんだ。余分な危険を回避する人間の知恵だ」

「そんな法律、必要のない人間に押しつけられても迷惑だわよ」

摂夫が恐れる世間体の悪さなど斎子は一向に気にかけていないのだ。

「だから、世間は何もしてくれないし常識は当てにならないと言つてるのッ。恥かきッ子つていうのは世間におもねて自分がへり下つて使うのよ。他人からそう呼ばれる筋合はないわ。幸せに妊娠して出産した経験のある女なら誰だつて恥かきッ子なんて呼びやしないわ。遅れてやつて來た祝福を恥ずかしいだなんて」

摂夫は妻を思いどまらせることができなかつた。

人は自分の力が及ばないとき、常識に頼るのか、自分の内なる声に従うのか。

常識の側につければ、彼の世間体がいよいよまずくなり妻の分まで恥かしい思いをするのは目に見えている。世間のやつらは恥かきッ子に興味がなくなるまではバカにするだろつ。摂夫自身が見下した

くなるような連中からバカにされることは彼のプライドが許さない。彼は世間の嘲笑をかわして自分の面子が立つ方法を考え出さなければならなかつた。

### (十一)

摂夫は心に浮かんだ思いつきに呆気にとられて思わず苦笑した。次の瞬間にはその愉快さに声をあげて笑い出しそうになつた。家庭で何事か方針を決めるのに妻の意見を探つたことなど一度もなかつた彼が、妻の考えにそつくり従おうというのは百八十度の方向転換だつた。……世間にバカにされる前に自分からバカになつてしまえばいい。これが世間で言つバカになるつてことだ……。

斎子はかつてニンニクの臭いが気になるなら自分がニンニクを食べるのが一番の解決法だと乱暴なことを言つたことがある。そのときは鼻先で笑つて聞き流していたが……。

「こと生命に関してはどう考へても殺すより生かすのが基本だ。斎子のが正論だ。びくびくもおどおどもすることではない。笑うやつには笑わせろ、それでいいではないか、それがいいではないか。女房の好きな赤鳥帽子と言われようと何と言われよう、一心同体の夫婦とはそういうことだ……。

摂夫には斎子の自信が何ともたのもしく思えて來た。重苦しい黒い霧がすつきり晴れて視界が開けたようだ。周囲に気づかい神経をすり減らしてやつてきたが、特別な恩恵にあずかったことはない。自分がバカになれば、どだい世間の思惑なんてものは……。

彼は妻の顔を正面から見据えて言つた。

「わかつた。産んだらいい。生まれてくる子を祝福しよう。ただ、春香に知らせるのだけは少し待て。あいつもまだ学校に慣れなきやならん時期だ。なに、夏休みに帰省したらでかい腹を見せて驚かせてやりやいいや、あつはつは」

「春香はあなたの子よ、十八が二十五はなれていたつてきつとよ  
こぶわ。弟かしら、妹かしらね。ふふつ」

摂夫は妻の顔がラファエロの描く聖母のように見え、自分の心が  
はつきり一まわり大きく大きく強くなつたと実感した。人から問われ  
たら、第二子ですとキッパリと言つてやる。気持ちの持ち方ひとつ  
で手に負えない世間の思惑も実体のないものになる。準備を整え  
て戦うまでもない。窮すれば通じて案ずるより産むが易しの無手勝  
流だ。

妻の信念が自分の中にも自信になつてみなぎつてくるのは悪い  
気分ではない。彼は一種すがすがしい気持ちのうちに喜代沢長明・  
素明父子のことを思い出していた。

……俺は常識で勝てると踏んで喜代沢長明に対決を挑んだのだつ  
た。そして、自分の狭量さに腹を立てているだけだと言わると反  
論ひとつできず引き下がつた。あの日、神社から戻つて俺は地団駄  
ふんで口惜しがつたのだった。今また斎子に反対してちっぽけな我  
を通してどうなる？ 素明は長明が五十一のときの子だからたいし  
たオヤジだったわけだ。神主は半気違いだと自嘲していたが、生命  
は誰のものでもないと言つた。何事も生命のあるうちだと言い切つ  
た。喜代沢の信念は常識にうち克つていたのだ。東大へ行つた素明  
もそつした父親が誇りだつたからこそ、父親と同じ宗教家になると  
言つたのだろう。

夏休みが始まるころ春香から家に電話が入つた。斎子は夕方の買  
い物に出ていて摂夫が電話に出た。

「意欲さえあれば一年生でも参加できるつていうの。そう、集中講  
座よ。自信のない私としてはさ、ここでしっかりやっておきたいわ  
け。卒業単位を心配しながら国家試験を受けるなんて筋道できない  
もの、はつはつは」

春香は電話の向うで快活に笑つた。夏休みの終りの頃に数日だけ  
帰省するという連絡だつた。

「俺に似ておまえ、がんばり屋だな。すっかり大学生だ。わかつた。身体に気をつけてな。お母さんには伝えておく。八月の末には帰れるんだな？」

#### (十四)

体格のいい斎子の妊娠は目立たなかつた。目立つてうわさになる前に彼女はあつけなくこの世を去つた。クモ膜下出血だつた。娘からも太り過ぎを注意されていたが、女性の体型はこういうふうにるものなの、フェミニン・フィギュアつてもんじゃないと笑つて取り合わなかつた。

医者に斎子の臨終を告げられて、摂夫は改めて氣づいたように妻の腹の中の子のことを尋ねた。

「妊娠してたゞ、え？ 十八週？」

「たしかそうだつたと……」

「十八週だと取り出しても自発呼吸できません。お母さんがあとひと月半もつていれば、赤ちゃんだけは何とか……」

医者は聴診器を耳から外して首を振つた。

「超音波で診るまでもないです。お力落としのことでしょうが……」

「十一週を過ぎてますから胎児のほうも死亡届を出さなきやいけませんが、どうします？」

「どういう意味ですか？」

「子宮口を開けて赤ちゃんを取り出しますか？ これくらいのもんでしょうが」

医者の親指と人差し指の間は一〇センチほどしか離れていなかつた。

「普通は取り出すもんなんですか？」

「さあ。通常分娩なら戸籍との関係も出てきますが、胎児の死亡届は市から火葬許可をもらうだけです。いっしょがいいですね。別々だと火葬が面倒というよりかわいそうです」

「はあ……」

春香が母親の葬儀に帰省したのはお盆の最中だった。列車はのろのろと走つて春香は苛々し通しだった。八王子 西国分寺（武蔵野線） 武蔵浦和（埼京線） 大宮（新幹線） 高崎（上越線） 沼田で新幹線はたつたの三駅しか通らない。同じ関東平野かと思われるほど不便この上ない。車なら関越自動車道を一本なのに二時間、六千円かかる。同級生のように高校時代に免許を取らなかつたことが悔やまれた。

上越線が雷にやられて途中で止まつたと言つて、春香は通夜の客があらかた帰つた夜中の斎場に現れた。上越線の電車に閉じ込められた何時間かで春香は亡靈のようにやつれていった。亡靈は泣きながら摶夫の胸を拳で叩いた。

「なんで、ちゃんと見てあげなかつたのよッ」

「すまない。まったく急だつたんだ」

「やつよね、お父さんにもビリにもできなかつたのよね。やつよね

……

棺におおいかぶさるよひにして春香は、返事をしない母親に何度も何度も呼びかけた。

翌朝、美容師が斎場に出向いて来て春香や親戚の女たちの喪服を着付けた。春香はこの時はじめて大人の着物を着た。スキなく着付けられた喪服が成人前の春香をいつそう痛々しく見せた。

「氣を落さないでね。これからは何でもおばさんが相談にのるから、いい？」

武山里希子の言葉に春香はハラハラと涙をこぼしてやつと答えた。

「おばさん、ありがとうございます。よろしくお願ひします」

春香は棺の脇に喪主の摶夫と並んですわり弔問客に頭下げづけた。出棺の時刻になると、父と娘はそれぞれに白木の位牌と遺影を胸前に抱いて、棺を乗せた市のマイクロバスで火葬場に向かつた。

母と胎児はいっしょに荼毘だひに付された。いちばん先に骨揚げをすませた喪主の摶夫と春香は、親戚の群れを離れて、乾燥した空気が異様に熱い拾骨室の隅に引き下がつた。愁嘆の場で腑抜けたように虚ろな表情な摶夫の姿が哀れだった。一重の喪失感に耐えなければならぬ摶夫は感情というものを喪くしていた。親戚縁者も彼の様子に斎子への愛情がそれだけ深かつたのだろうと新たな涙をさそわれた。

彼は母親を亡くした春香に、弟か妹がいっしょに焼かれたとは言えなかつた。十八週の胎児は斎子の腹の中にいた証拠を一片も残さず消えていた。

「初七日まではいたほうがいいんでしよう?」

春香が父親に尋ねた。

「親戚にひと通りの挨拶ができるならそれでいいわ」「でも、それじゃあ……」

「いいから東京に帰れ。集中講義も後半が残つてゐるじゃないか。お前がどれほど悲しんでもお母さんはもどりやしないんだから、な」「そりゃそりやうだけじ……」

摶夫は翌日の朝、追い立てるよつとして春香を東京へ発たせた。

### (十五)

「ひとり暮らしでやることもないから、これからはせいぜい東京へも出かけるようにするよ」

春香から電話が来るたびに摶夫はそう言つたが、ついに彼女の卒業式まで一度も東京には行かなかつた。斎子の命日と限らず墓所に出かけでは、掃除や草むしりをした。彼は花を手向けて墓の中の妻に語りかけた。

「……おまえがいなくなつてから言つのも何だが、俺たち夫婦の相性はそれほどでもなかつたな。でも、おかしなもんでおまえが死んでから、ますますおまえのことが好きになつてゐるんだ。……そんな

迷惑そうな顔をするな。…………いや、過去にとらわれてセンチメンタルになつたわけでもない。おまえといつしょに生きて解らなかつたことの一つ一つを今さらながら知りたいと思つてな。……おう、春香のやつが薬剤師の試験に通つたぞ。さすがに俺の娘だ。……そうだな、おまえの娘だ。……学生寮を出るので、後輩たちに形見分けのようなことをしてゐつてさ。……卒業式に迎えに行つていつしょに沼田に帰つてくるよ。……市立総合病院に勤めることになつたのさ、沼田のだよ」

彼は自身の心境の変化についても妻に報告していた。

「……生身のおまえがいるうちは考えたくもなかつたが、頼るたよらないは別にしてさ、人間、どれだけ力もうが口惜しがろうが敵わないものには敵はない。チヨーメイさんな、おまえの一週間後に死んだよ。……乳癌のときは俺も気が狂つたように腹をたてたが、ある人のには教えられた。思い上がつた自分をようやく譲れるようなつたかと思つたときには、おまえがいなくなつていた。命あるうつくてのは本当だな。……靈なんて信じなかつた俺が、おまえの靈魂だけはいれくなきや困ると思うようになつた、ははは。……春香か？俺から呼び寄せたりするもんか。あいつから田舎に帰るつて言つたんだ。老人をいつまでも一人にしておけないとさ、おまえそつくりの口をきく、ははは」

摂夫は斎子の生前以上にことば数多く彼女と自由に会話した。一人暮しの寂しさから身についた習慣にしても、斎子のセリフは摂夫の自作ではない。彼は墓参りに来て故人に話しかける人を見ると何故かほつとした。さすがに妻が夜空のお星さまになつたとは思わないが故人との会話はこの世を去つた人への思慕が紡ぎだす幻想やでつち上げの一人芝居ではないと実感するようになつたからだ。人間はかけがえのないものを失つてでないと分らないものがやはりあるらしい。

……田舎に帰つて来るんだからな、ムコさんを探してやらにや。  
……決まつてる？ ウチに婿入りしてくれる？ そんな都合よくい

くもんかよ、はツはツは。……俺がびっくりする相手ねえ、そりや  
早く会わにゃなあ」

(十六)

玄関のチャイムが鳴つて、つづいて春香の声がした。

「お父さん、ただいま」

……春香が男を連れて來た。いよいよだ……。

春香の意中の男がついに我が家に足を踏み入れたと思つたとき、  
摂夫は忘れ物を急に思い出したような焦りにとらわれた。焦りはすぐさま不安になつた。やはり興信所にたのんでつぶさに検討すべきではなかつたか。……春香も二十八だ、もう大人だというときの俺は春香のことをどこまで知つていたのか。娘の意志を尊重してプライバシーに干渉しないなどというのは物分かりのいい父親を演じただけで、親としての責任を果たしていなかつたかもしれない。人から悪く思われたくないと気にしすぎる性格が、嫌われる舅になつてはたまらんと姑息な計算していたのだろう。軽率だったな……。当人のことだからと一生の問題を娘まかせにしておいたのは、医者といつだけで人物を確かめる前から納得していたことは否めない。さらに、斎子のように考える、鵜呑みにするほつが摂夫には何としても楽で心地よかつたのだろう。

それが父親としての摂夫のこの期に及んでの反省だつた。

……今日は首実検だ。春香との結婚を許す・許さないは即答しなくていい。相手が何者だろうと気圧されることはないぞ、婿に入つてくれるからといっておもねることもない。父親としての威厳を示さねば……。

「田所先生、ごめんください」

堂々と低い男の声に摂夫は脈拍が速まつた。

摂夫は一人に聞こえるように大きな咳払いをして玄関に迎えにでた。

青年は頭をさげていて顔が見えなかつた。

「お父さん、私の素明さん。<sup>やああきひ</sup>心療内科と漢方を掛け持ちでやつてる  
喜代沢先生よ」

春香の声を合図にしたように青年が顔をあげた。高校時代の面影を残しながら、素明はすでに患者の信頼があつそうな医師然とした顔になつていた。

「お久しぶりですッ」

彼は胸を張つて摂夫の前に握手を求めてサッと右手を突き出してきた。摂夫はその強引さが少し不快だつた。

……受入れるか拒むか、いきなり答を出せというのか。生意氣なところは昔と変わらんな。こうやつて自分から場の流れを作る人間はどうも苦手だ。流れを変えられない俺は気がつくと流されている力のある者には敵わないつてことか、春香は畜生の血をひいているんだしな……。

「君は宗教家になると書いて東大へ行つたのじやなかつたかい？」ためらいながら差し出した摂夫の手は素明の右手にしっかりと握られた。（ア）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8192f/>

---

知らぬがスサノオ

2010年10月8日15時54分発行